

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

皆さんこんにちは。午前中はいろいろありまして、登壇できなかったわけでございますけれども、ただいま若妻学級から大勢傍聴に来ておられますので、一生懸命頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

まさに3.11の悪夢と申しますか、去る3月11日のあの地震の後の大津波によりまして、車が流され、家が流され、大型漁船が流され、そして、大型客船まで流されて、大変多くの皆さん方の貴重な生命や財産が失われたところでございます。

そしてまた、東日本の大震災で亡くなられた皆さん方に対して、心からの御冥福と、そしてまた、さらには地震や津波、さらには放射能被害によって避難を余儀なくされている皆さん方に対しまして、心からお見舞いを申し上げる次第でございます。

私としても、一日も早い復興を望んでいるわけでございますけれども、遅々として進まぬ今の民主党の指導力に対して、私だけでなく、国民のだれもが憤りを感じていることと思います。

また、今日の一般質問で市長を初め多くの同僚議員が被災地に行った貴重な経験を言われながら、いろんな話をこの議会でされたわけでございますけれども、その経験を生かしていただいて、すばらしい武雄市をつくっていただきますよう期待を申し上げるところでございます。

さらには、市長は先日、陸前高田市に行かれ、その会議の様子がテレビで流れたわけでございます。一般質問でもありましたように、公文書さえ流れてしまう、壊滅的なこの状況の中にありながらも、今後の新しいまちづくりはITを駆使した、情報技術を駆使した近代的な行政をつくっていただく、そういうお手伝いを樋渡市長には、あるいはボランティアに行かれた皆さん方には、ぜひともこの御加勢をしていただきたいと思いますところでございます。

市長にお伺いしますけれども、陸前高田市ではどのような会議がなされたのか、お伺いする次第でございます。よろしくお願いいたします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

陸前高田市では、丸一日かけて、朝9時から夜の7時半までですかね、回って、そして、8時から10時まで会議だったんですね。その中で実際現場を見て、何が足りないかということと先ほど議員から御指摘がありましたように、公文書の全部流されとるわけですね、公文書が。役所で言えば。それと、圧倒的なボランティアの不足と職員の不足、そして、それを統括する副市長ですよ、これはテレビでも言いましたけど、KBCのニュースピアでも言いましたけれども、それを統括する副市長がいない。そういう意味ではもう私は幸せですよ、

前田副市長がおって。ですので、そういったことでさまざま足りない部分ということがそこで浮き彫りになったと。それをどうするかというのは次の課題としてあるというのが私からの報告でございます。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

テレビで見ていたわけでございますけれども、やっぱり中枢部、コントロール部がなくなっていると。それともう1つは、やっぱり人海作戦で行政そのものがなくなっておりますので、それを加勢していく、この両方が要するという話を聞いたんですよね。だから、この中枢部がなければ、幾ら支援をやっても回っていかない。そういうことも聞きますので、この両面にわたる復興支援をぜひともしていただきたいと思うんですね。新しく一から始めますので、本当に先ほど言いましたように、やはりITを駆使したですね、そういう行政にぜひとも力をかしていただきたいと。

そのためには、どうしても復興支援の2つの方法ですけれども、うちのCIOの山崎さん、あるいは素晴らしい職員さんたちいらっしゃいますので、その方たちを応援という形になりますけど、実際はですね、やっぱりそのことは武雄市に返ってくると思うんですね。そこに出していくことによって。

そしてもう1つは、今はボランティアが多いし——10月は山口団長初めですね、ボランティアに行かれるそうでございますけれども、もう1つはぜひしていただきたいのは、やっぱり作業プロといいますかね、土木プロといいますかね、土木作業員の皆さん方をやっぱり1カ月、2カ月、長い間かけてやっていくと、この考えも必要と思うんですね。だから、1カ月、2カ月行くということは、無償では行けないですね。だから、賃金を払う。つまり、どうせ人手不足だと思いますので、有償ボランティアとしてですね、賃金を払ってやって有償ボランティアとして、そして、50人、100人組んで、そして1つのまちを支援していくと、こういう形も要るのではなかろうかと思うんですね。中枢の支援、人海作戦、この2面にわたる支援をぜひともしていただきたいということですね。そのためには、どう言いますかね、やっぱり旅費ぐらい出してやる。あるいは宿を世話してやる。一番今、復興支援で問題になっているのが、どこにやられるかわからんと。運転して行ったら、原発で働かされたり、そういう不安があるんですね。そこはやっぱりちゃんとして、樋渡市長と向こうの自治体がちゃんとしておけば、そういうことはありませんので、そういう不安を取り除く。この2つの支援策が考えられますけれども、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

全く同感ですね。まず、コントロールの部分に関しては、幸いにして私は内閣府の、私の直系の後輩がいますので、その職員を副市長として内閣府にお願いを、陸前高田市長と一緒にお願いに行き、内閣府の人事課長から、もうそれやったら出すということで。その際言われたのは、内閣府から副市長として——弱冠36歳ですよ——出すということで、その彼をきちんとサポートしてほしいということですので、そのサポートする職員を私ども武雄市、あるいはハート・タウン・ミッションの松阪市であったりとか箕面市から出すということになります。

人海戦術は、名古屋市とか大きい市がもうどんどんどんどん出していますので、そこはそこをお願いをするということで、それぞれの持ち味を生かした支援をやるということが1点。

それと、長くなりましたけど、2点目の有償ボランティアですね、これはぜひやりたいと思います。今ですね、きょう私のところへツイッターで入ってきましたけれども、もう素人ボランティアは要らないと書いていました。素人ボランティアは、もうせいけん市長さん来られても困りますということですので、やっぱり玄人の山口昌宏団長さんのごたっ人がですね、行って、実際土木を作業される方が行くと。ただ、これは全くお金を出さずに行ってくださいというのは、それは無理ですので、有償ボランティアという形で制度をつくります。その上でそれを、じゃあ、今タウンステイの義援金で700万円あるわけですね。恐らくその700万円は、もう皆さんがそれに使ってほしいというふうに来ていますので、それはオーケーなんですね。ですので、一発目は、その中で使いたい。それでどうしても足りないとなった場合には、それは市費を投入することになりますので、その際は議会にまたお諮りをしたいというふうに思っていますので、まず、早目、早目にその制度を構築して、繰り返しになりますけれども、その予算の手当というのは、義援金の一部を配分したいというふうに思っています。

これも真っ先に議会とまたよく相談をしたいと思って、小池一哉委員長もしっかり聞いておられますけれども、委員長さんを初めとしてよく相談をしたいと、このように思います。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

よく考えたらですね、東北の津波ですね。これは大規模災害で長期にわたるということなんですね。今度、私がきょう一般質問しようと思っている中身ですけども、もう1つは原子力災害ですね。原子力災害というのも広範囲にわたるんですよね、放射能の被害は。そして、チェルノブイリで見てわかりますように、長期にわたる。この辺では似ているんですね。だから、ぜひとも、もう皆聞かれたので言いませんけれども、姉妹都市構想。これはちゃんとした姉妹都市構想していなければ、津波は来ませんが、同じ形の津波が来るかもわからないですね、うちは。これからそれを主張してまいりますけれども、そういうことです。

ので、東北で違うところじゃない、うちと一緒にだという気持ちでぜひとも取り組んでいただきたいと思います。ありがとうございます。

それでは、私の本題でございます、今度の福島原発の事故を見まして、武雄市民の皆さん方を放射能の被曝からどのように守るか、その1点に絞って、きょうは質問をしてみたいと思います。

まず、今の民主党政権を見ておまして、もうびっくりするような話ですけれども、ついこの前までは地球温暖化、そのためには原発を進める、50%にすると書いていたんですよ。そして、今度福島の事故が起きましたら、今度、反原発のほうの人数が多いということで、どこの市長と言いませんけどね、ぼんと乗って新エネルギーと言うんですね。エネルギーというのは日本の根幹だと思うんですね。だから、その分については非常に難しいし、それだけでも知恵を持ち合わせておりませんので、私が言いたいのは、今、確かに玄海原発がある、これは放射能漏れ99.9999……ないでしょう。しかし、万が一あるかもしれないということから、きょうは質問したい。つまり、原発に賛成、反対関係なくですね、使用済み燃料がそこにある、放射性物質がそこにあるということは、いつ武雄市が被曝に遭うかもしれないという現実は避けられないと思うんですね。そういう気持ちで質問をしてみたいと思いますので、よろしく願いいたします。

考えてみますと、これまで原発は安全だ。安全だから事故はない。事故はないから放射能漏れはないということで、ずっと進んできたと思うんですね。この安全神話というのは、皆さん御存じ、市長御存じだと思いますけれども、1976年、アメリカで言われて、アメリカの安全委員会が言うたことですけれども、原子炉のメルトダウン——メルトダウンは大分わかったですね、炉心溶融。こういう破局的な事故は、メルトダウンはやっぱり破局的ですよ。めったに起こらない。めったにあると言いますけれども、メルトダウンを起こせば、その会社はつぶれると、保障できないと、そういう大きな事故だというとならえ方なんですよ。だから、メルトダウンという破局的な事故はどれくらい起こらないかというのはですね、アメリカに言われたことですけれども、隕石がヤンキースタジアム、野球でしょう、そこに落ちる可能性よりもっと小さいと言った。だから、日本でもそれが安全神話になって、ほとんど今まで放射能漏れに対する、放射能に対する考えは日本でされていないです。だから、今のこの混乱ぶりなんですよ。

市長にお伺いしますけれども、放射能漏れという想定外のことが起こったですね。そして、これからは想定内ですよ。想定内ということになれば、当然、放射能漏れに対する対策が必要ですよ。市長は5月18日つくられた。しかし、きょうのテレビを見てお見しても、30キロ圏内のEPZに入っておらない。しかし、それはくさらずに、やはり武雄も原子力被曝を想定しなければならぬと思いますけど、いかがでしょうか。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

30キロは牟田さんの家、40キロは武雄市役所、50キロが西川登です。そういったときに、これは人ごとじゃありません。したがって、想定内として原発で放射能漏れというのをきちんと想定して対応するというのが、我々首長、そして、議会の務めだと、このように考えております。議長すみません。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今度、物すごく違和感を感じたのはですね、放射能漏れ、被曝。相手を被曝させるということは、やはり相手の体に傷をつけるということなんですよ、被曝させるということは。高濃度の被曝をさせれば相手を死に至らしめる。そうなれば被曝というのは当然、傷害罪なんですよ、この観点が政府にないという感じがするんですね。そしたら、当然、国がこれまでにいろんなことを関与してきていますからね、関与。今度何か、海江田さん来たんですか、来っとですかね。（「来ると」と呼ぶ者あり）来っとですかね。海江田大臣がみずから来て、玄海原発は安全だと言うんでしょう。国が安全だ、安全だと進めてきたんです。そしたら、国の責任は大きいですよ。そうしなければならないと思うんですね。だから、国はひどく言えば被曝者が、被曝される人たちにごめんなさいという姿勢、要るんですよ。そう考えていきますと、ICRP、国際放射線防護委員会ですよ、少なくともここで、全世界の共通ですよ、統一されているのが受忍の限度、社会生活する上で我慢しなければならない、その限度というのは年間の1ミリシーベルトなんですよ。本当、クリアリングレベルというのは10マイクロシーベルトぐらいですよ。

しかし、都会で、例えば、生活する上においては肩と肩はぶつかるかわからんですよ、足を踏まれるかわからん、これは受忍の限度なんですよ。しかし、顔をたたかれたりしたら、これは立派な傷害なんです。これと一緒にですよ。だから、政府は心として、気持ちとして、まず、1ミリシーベルト以上迷惑をかけるところに対しては、費用をすべて出しますので、どうぞ避けてくださいというふうな、そういう謙虚な態度が民主党政府に要ると思うんですけども、その姿が見えないと思いますけれども、いかがでしょうか、お伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

全部が国の責任とは言いませんけど、やっぱり7・3だと思うんですね。国の責任が7、東電の責任が3だと思うんです。その中で、私は傷害罪というのは議員から言われて初めて思いましたけれども、全くそのとおりでと思いますね。

民主党がそういう姿勢を示さないことが、やはり私は最大の問題点だというふうに認識をしております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、今まともに見えますように、海江田大臣でしょう、国ですよ。だから、国と被曝者、住民ですね、国と国民と電力会社と考えたときにはですね、これまで国がいろんな原発に対して許認可してきたと思うんですよ。安全基準を認めてきたと思うんです。これ大事なことと思うんですね。

調べてみますと、今度の福島も大体想定の高さ5.7メートルやったでしょう、津波の高さ。その5.7メートルに安全率の1.5掛けて9メートルつくったんだというんですね。それを認めてきた国の責任というのはやっぱり大きいと思うんですよ。これはやっぱり国も謙虚にしなければならぬ。そして、被曝された方たちのことをまず考える。しかし、国は何をしているかと言いますと、5月14日、これまでずっとメルトダウンしていないと言っていたんです、5月14日は賠償スキーム決めたんでしょう。東京電力をつぶさないと決めたんですよ。それから、何日の新聞ですか、6月18日の新聞。これは原発廃炉で新法を検討している。金が要るから、そこにつけましようということ。しかし、住民はほったらかしですよ、今の状態でですね。

質問に入りますけれども、今回は原子力安全委員会、E P Zというのは防災対策重点枠なんですかね。これはIAEAの指導で8.15ですかね、広げようとしよっですね。国も検討しよる、していますけれども、私に言わせれば福島原発で見るとは、この同一円では武雄市民を被曝から守ることはできないと思うんですよ、守ることができない。放射性物質は風によって飛んでくるんですね、風によって飛んできます。だから、今回の福島原発で明らかになったのは同一円に爆発するおそれがあるからということ。うちは、武雄が受けるのは爆発後に受けますからね。今E P Zでしているのは爆発のおそれがあるからということ。うちは、武雄が受けるのは爆発後に受けますからね。今E P Zでしているのは爆発のおそれがあるからということ。うちは、武雄が受けるのは爆発後に受けますからね。

昨年、浜岡原発ですか、今とめてあるところ。あそこで防災訓練があった。菅さんは本部長やった。そこでもやっぱり爆発のおそれがあるからというて訓練しているんですよ。だから、去年訓練しとって福島の対応ができない、そりゃ爆発後がなかったからですね。

市長にお伺いしますけれども、だから、放射線被曝を防ぐためには同一円じゃなくて被曝線量、放射性物質、それによる避難をしなければ武雄市民は救えないと思うんですね。そこで、お伺いしますけれども、今、国が示しているE P Z、これに放射線被曝による避難、放射線被曝による避難は規定されていないと思うんですね。繰り返しますけれども、国が示しているE P Zに何ミリは逃げなさいとか、そういう放射線被曝による避難は規定されていないと

思いますけれども、いかがでしょうか、答弁求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

規定されていません。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

それが、やっぱりどういうですかね、放射能漏れのおそれがあるということで訓練しているから、それが先ほど言うた安全神話なんですよ。もっと言えば重大事故を想定して、日本語で言うぎ電力会社に言い切らんやったというだけです。やっぱり電力会社がどんとおるのに重大事故の検討はできなかった。全国していないと思うんですよ、これは。だから、我々が今考えなければならぬのは放射能が飛んできたて、放射性物質が飛んできたときどうするかという考え方をしていかなければならないと思うですね。

どう言うですかね、あんまい怒らるっかわからんばってん、玄海原発爆発したとしますね、放射能が飛んできた。まず何をするかです、何をするか。これですね、国会、参議院ですね、それ見ておりましたら、佐藤さんか、自衛隊でしょう。佐藤さんが菅首相に聞いたとき、爆弾が落ちたときにどういう考え方をするかと聞かれた。爆弾が落ちたらあんたどう考ゆっねって。まさかサーベイメーター持ってくっわけいかんし。そしたら、まず、風下から避けるというですよ。自衛隊やけん、逃げるって言われんやったでしょう、風下から逃げることです。それはなぜか、毒ガスかもわからん、サリンかもわからん、細菌兵器かもわからん、放射能かもわからんということで、まず風から逃げると言うんです、風下からかわすて。放射能も一緒ですよ。ただ、これはたちが悪いのは見えない、におわない、痛くもない。わからんとですよ。だから、まずは風下を避けるということなんですね。だから、先ほど言われた同心円、無意味と言いませんよ。武雄にとったら無意味ですけどね、と思うんですよ。

そこでお伺いいたしますけれども、今の話を聞いて、放射線被曝をしないためには、放射線物質が拡散する、こっち飛んでくるだろうとか予想図、スピーディってあるんですけどね、予想図に基づいた避難、見えないんですからね。痛くもない、においもしない、何もわからない。だから、そういう予想図に基づいて避難する、同心円ではだめだと思うんですね。そういう避難をしなければならぬと思いますけれども、答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

同感です。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

市長も見られたと思いますけれども、きょう、川口市の話が載っていたんですね。1.6ミリシーベルトを基準とするという話ね。それ一緒なんですね。だから、30キロ圏外にある私たちは、やっぱりこの被曝線量による避難を国に認めさせなければならないんですね。EPZの中に、どう言いますか、放射線量地における避難を認めさせなければならないと思うんですね。

福島原発で同一円による避難ですよ。これでどういうことが起こったか。20キロ圏内の人が30キロ圏外の風下のほうに逃げたという話は御存じですよ。風上から風下に逃げたんですよ、30キロ圏外だって。その30キロ圏外の風下というのは飯舘村、これ今はもう避難したんですかね。飯舘村、川俣町、伊達市なんです。こっちのほうはひどいんですよ。そこに同心円でおって逃げていったという過誤があるんですよ。このことについて、市長、何か思われれば、どうぞ。いや、手挙げよんさったけん。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

もうEPZやっぱりおかしいんですよ。だから、そうじゃなくて我々がやっぱり考えなきゃいけないのは、絶えずやっぱり風下にあって最悪の放射線量ということをやっぱり想定して、それに対して、いつ、どれだけやっぱり逃げるということが大事だというふうに思っております。

あんまり政府の言うことば信用したらいかんというともよくわかりました。民主党さん、もう本当頑張ってください。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、放射性物質は自分で飛びませんので、風とか、あるいは福島の場合は水素爆発で飛んだんですね。実際、水素爆発が起こった時点でメルトダウン、だれでもわかっていたんですよ。私、素人でんわかったのはジルコニウムが酸素をとって水素が残って爆発したと、これ事務局で調べただけでわかったんですよ。

しかし、放射能は今言いますように、風とか、あるいは水素爆発と、爆発したとき大気圏に飛んでいったんですね。そして、被曝を受けているんですよ。だから、目に見えない、においもしない、痛くもない、この放射線をどうして逃げるかという話ですけども、実はちゃんとあるんですね、日本には。（資料を示す）これスピーディという。見られたことある

と思います、これスピーディなんですね。これは予想図をつくるんですけど、これは文部科学省から出たスピーディです。これは万一の緊急事態に備え、被曝線量、ここで始めて被曝線量が出るね。被曝線量予想図形を15分で作成する。そして、各原発に配信ができる装置があるんですよ。110億ぐらいかけたとですかね、あるんですね。それで、各原発の情報が原子力安全センターに集められる。日ごろから集められるんですね。そして、文部科学省、これはもちろん文部科学省の所管ですけども、経済産業省のオフサイトセンター、あるいは原子力安全委員会、地方公共団体が専用の回線で結ばれておるんですね。

今この瞬間もですね、玄海原発すべて原子力安全センターに情報が集まって、風はどっち、すべて集まる。だから、起こってはならないけど、今瞬間に玄海原発が爆発しそうになっていると、爆発するかもわからないというときは、今爆発したらこういうふうに飛びますよというのが立体的に出てくる、色がついてですね。だから、目に見えないのをスピーディでしている。この動画をですね、ぜひともここに電子黒板を置いて、そして、市民の皆さんと一緒にになって、こういうものだということをぜひとも動画を流したいということをお願いしましたけれども、それはだめだということ断念しましたけどですね。

資料よかですか。平面図でいきます。いいでしょうか。

(パネルを示す) これは2004年7月22日です、想定図ですよ。2004年の7月22日の10時から4時までの、この放射線物質が飛んだ様子を書いてあるんですね。それで、ここは15キロとなっていますけど、もっと下までありますから、20から25キロ飛ぶんですね。この日は北西の風が吹いていたと。だから、このような形で飛んでいきますよというんですね。鹿児島島の川内原発ですけど、そのすぐ近くの人が、遠くに行っても被曝するんですね。だから、これをちゃんと知って逃げなければ被曝するという、スピーディですね。

次のページをお願いします。

(パネルを示す) これが実際、3月12日から24日まで飛び出した沃素の量です。一番外には赤い大きく引っ張っていますけど、これは一番薄いですよ。見やすいように、そういう一番赤く引っ張っております。私が見てほしいのは、この赤の先のところにある大きいまち、これは飯館村なんです。30キロ圏外、飯館村へ飛んでいる、川俣町に飛んでいる、伊達市に飛んでいる、こういう状態がスピーディで3月12日にわかったんです。もちろん官邸に届いていますけどね。

それから、航空機モニタリングちゅうともあるんですよ、航空機モニタリング。これは地表面の放射性物質の蓄積状況を確認するためですね、航空機、これに大型の放射線検出器を搭載して、そしてはかるんですね、ガンマ線をはかるんですよ。アルファ、ベータ、ガンマありますからね、アルファ線、ベータ線はほとんど飛ばないんですよ、御存じだと思いますけれども、1メートル以下なんですよ。だから、航空機で探査するためには、そのガンマ線だけしか見えない。だから、ほとんどガンマ線をつけているんですね。検査機はですね、と

いう状態ですね。

放射線は、放射性物質は後で教育長に聞きますけどね、下に落ちて下から放射線を出すんですよね。放射性物質から。これ勘違い。だから、その上から見るんですね。まあ、知ったふりしますが、アルファ線とベータ線はほとんど出ない。プルトニウムはアルファ線ですよね、だから検知しにくい。若干のガンマ線は出しますが、プルトニウムは物すごく検出しにくいという状態なんです。

きょう、東京電力が9人目ですか、内部被曝したですね。内部被曝するんですよ。内部被曝は線量計に出ないんですよ。当然のことですけれども、あれはマスクをして完全に体内に入れないという考えなんですね。しかし、実際無理ですよ。だから、内部被曝のために今、どう言うですか、抗体がなくなっている原因ですね。

次の資料をお願いいたします。

(パネルを示す)これが実際、何日やったですか、今回、4月6日から4月29日までセシウムが飛んだ様子なんです。円の中心がもちろん福島原発ですね。そして、南東の風に乗って北西のほうに飛んでいった。ここが飯舘村なんですね。そして川俣町、それから見てください。伊達市の中に黄色がありますね、これホットスポットですよ。こういうところで高い線量が出るんですね。そして、ずうっと下に薄いのがあつたんですね、これ薄いと言ってもかなりあるんですよ、放射能は。80キロ圏近くまで飛んでいる。だから、風の方向がわからないときには、アメリカは80キロ逃げたんですよ。きのう、質問ありよつたですね、94キロ離れているところで放射能の雨が降るから家に入ってくださいと言われて。それが実態なんです。それが地表に積もってなかなかとれない。だから、30キロなんてすぐ飛んでくるんですね、武雄市全体入るて、おどすわけじゃないですけれども、そういう状態が実践であらわれているんですね。

次のページをお願いします。

(パネルを示す)これは玄海原発と武雄市の関係、これは上野議員のときやったですかね、資料出ていたですね。だから、今EPZで真ん中の10キロ、そして、20キロに上げた。今度は7市ですか、7町ですか、30キロでするときょうの朝も言いよつたですね。うちはその外なんですよ。だから、安心じゃないんですよ。

先ほど言いましたように、前の資料を見てもらつて、放射線はこのように飛んでいくということで、今逆さまにしましたけれども、反対の風が吹けば、今の逆さまにしてみてください、武雄市に飛んでくる状態が映るんですね。

そこで、全くの絵そらごとですよ、私がつくったもんですから、次のページはね。勝手に今の地図に福島の状態を載せてみた。もちろん地形が違うし、いろいろ違いますよ。だから、全く絵そらごとですけれども、載せてみれば次のページになるんですね。(パネルを示す)中心が玄海原発、10キロ、20キロのEPZ、30キロ圏外、しかし、武雄市に飛んでいるんで

すね。皆さん覚えておられると思いますけれども、一番苦勞したのが伊達市、川俣村、それから飯舘村、飯舘村は川俣町でしょう。政府はE P Zで避難させたため、物すごく泣いたんですよ、彼女たちは。子どもが大変なことになっているんですよ。この大量被曝は、この調子は武雄市もだんじじゃないと思うんですね。こういう可能性もあるかもしれないということ覚えていただきたいと思います。

話がちょっとそれましたけれども、福島原発と飯舘村、川俣町、伊達市と玄海原発と武雄市は同じ位置なんですね、風の吹き方が違うと。3月で南東の風が吹いていたために川俣町へ行った、飯舘村へ行った。もし玄海原発が――爆発しないですよ、しかし、原発やめてもさっき言うように、使用済み核燃料があれば放射性物質残りますからね、もし飛んできたとすれば、冬。冬はほとんど北の風が吹きますね。北もしくは北西の風が吹く、それが先ほど言うた北北西の風が吹けば、ちょうど武雄に降るんですよ。そういう関係でございます。

そこで、市長これはぜひ、だから、放射性物質拡散予想図による避難、何ミリシーベルトは逃げなさいという避難を国に認めさせて基準をつくっとかんぎいかんと思うんですね。武雄市の皆さんの生命、財産守られないと思うんですよ。

市長にお伺いしますけれども、国が避難指導を発動しなければ、国が避難しなさいと発動しなければ、どんなに放射線量が高かっても自分で避難したのでは補償の対象にならないと思いますけど、いかがでしょうか、お伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

おかしいですよ。現行では補償の対象にはなりません。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

だから、そういう状態ですので、ぜひとも今後ですね、いつとも早くやっぱりこういう運動を市長が先頭にしてもらって、やっぱり福島でわかっているやないかって。だから、E P Zの輪切りだけじゃないんだと。事故後は放射能が漏れますので、事故後の対策を考えようやと計画をぜひともしていただきたいと、今ですね。これはお願いしときます。

それでは次に、教育長にお伺いたしたいと思います。

結局、今、話をる言いましたけれども、スピーディでは、これを官邸採用しなかったんですよ、官邸採用しなかった。そのため多くの子どもが被曝したんですよ。被曝しているんですよ、いまだに。今もですね。これは細野、何ですか、あれは。首相補佐官ですか、一番好きだった人ですけどね、民主党の中でも。あの方は何と言ったかと、公表しないと行ったんですよ。すべて公表しない。公表しないということは、今言うように30キロ圏外にある風

下の人が逃げられなかったんですね。公表しないということは一部の人に犠牲を強いることなんですよ、犠牲を。枝野官房長官は知らなかったと言ったんですね、知らなかったと。これ実際の話ですけれども、産業経済省の保安院は、3月11日から16日の午前中まで42回スピーディを出力しとつとです。そのうち、3月12日の放射線、スピーディのデータを官邸に届けていたことがわかったんですね。それを無視したんですよ。先ほど言うように、知らなかったと言う人もおるし、一人は、パニックになるからとしていないんですよ、公表を。それで、ちょうど武雄と一緒に飯舘村を犠牲にしたんですね。直ちに守るのは子どもですよ、成長期にある。成長期にあるから怖いんですね。

御存じだと思いますけど、沃素、セシウムが飛びますね。沃素は8日間で半減すると言いますが、これは甲状腺がんを引き起こすんですね。しかし、24時間以内に薬をやれば免れるんですよ。これ確認はしていませんけれども、アメリカのほうから、その薬を日本にやると言ったんでしょう。しかし、政府は薬事法の関係で断ったんですよ。政府は何をしたか、3月16日、薬の投与をしないと決めたとですよ。なぜかわかりません。24時間過ぎたからやらなかったのか、被曝線量が少なかったからやらなかったのか、これは後で歴史が必ず証明しますからね、これは私もわかりませんが。

それで、教育長にお伺いですが、私、民主党政府は大好きやったとですよ。子どもは社会で育てると言っておりました。子どもは社会で育てる。そして、無駄を省いて子育て手当に充てるんだと、こう言っていた。だから、私も1票入れたしですよ。しかし、今回、乳幼児を含めた子どもたちを、放射能作業員というのですか、それと一緒にレベルの年間20ミリシーベルトと同等にしたんですね、子どもたちをひっくるめて。大変なことだと思うんですね。

放射能障がいというのは、5年、10年、15年、20年、後発性ですね。教育長、これ私の考えですけどね、うちシロアリで食われよったけんようわかつとですけども、はりをシロアリが食うようなもんだなと思うんですよ。外から見えない。しかし、内部はぼろぼろになっている。これが放射能だと思うんですよ。

そしてまた、水銀、水俣病、これも長うかかったですね。イタイイタイ病、ダイオキシンは私がここで何回も言うとおりで、あのベトちゃん、ドクちゃん、三世がいまだに奇形児が産まれているんですよ。

ちょっと話はずれますけれども、今、私が松尾初秋議員と一緒に伊万里のほうの広域圏議会行っていますよね。松浦地区の方がうちに処分場を持ってきていいよと言われた。だから私と松尾議員一生懸命なって、とにかく被害を起ささないよとということで、どの機種がダイオキシンの出る量が少ないかということを生懸命、2人であっちこっち勉強して回りましたよ。沖縄に行きまして、いろんなところに行っていました。

現実は今、杵藤クリーンセンターは規制が1ナノグラムです、1立方メートルの中に。1

ナノグラムというのは10億分の1グラムですよ。10億分の1というとはなかなかわかりませんが、これも前言いましたけれども、1キロメートルの箱の中に1グラムあるのが1ナノグラムですね。今度、伊万里で規定されるのが0.1ナノグラムなんです。

しかし、先日、古川委員長と一緒に姫路のほうに行ってきたんですね。そのダイオキシンはどれくらい出ますかと委員長が聞いたんですけれども、答えられたとは0.00004ナノグラムですよ。ゼロ以下4つつくんですよ。そういう今の——去年から稼働していますね、新しいものは。よく高いの安いと言われるですけども、あんまり変わらないんですけどね、本当はね。少々高かってもね、私はせつかくうちでいいよと言ってくれる松浦の人にね、やっぱりそういう機械をやるべきだと思うんですね。ぜひとも風評被害から守ってやらにゃいかん。ナシ園もありますし、いろいろありますから、それが大人でなければならぬんです。

教育長、お伺いしますけれども、放射能漏れで一番犠牲を強いられるのは成長期にある子どもたちなんですね。この子どもたちに受忍の限度、大人でも1ミリシーベルトですよ、それを放射線を扱う作業員さんたちの最高レベルの20ミリシーベルトに引き上げるというのはどう見てもおかしい、無理なことだと思いますけれども、どのようにお考えか答弁を求めます。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

お話にありましたように、子どもは大人よりも放射線の影響を受けやすいということは、もう事実でございまして、放射線、見えないことと同時に積算される部分もありますので、子どもを守るということは非常に大事なことだと思っておりますし、20ミリシーベルトにつきましては非常に高い数値だというふうに思います。

ニュースでもありましたけれども、小佐古内閣官房参与が子どもの20ミリシーベルトは許しがたいということでおやめになったような数値だろうというふうに思います。

その後、5月27日、ちょうど全国の教育長会があつているときでございましたけれども、文部科学省は1ミリシーベルト以下を目指すという文部科学大臣談話を記者発表されました。

今の先ほど話にありました川口等も1ミリシーベルトというのを基準にされているかなというふうに考えているところでございます。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

全くですね、教育長にじゃないですよ、今の政府けしからんと思わんですか、1ミリシーベルト以上で危ないならば最初から避難させるべきですよ。シーベルトというのは雨を受け

る量ですね、ベクレルというのは雨が降ってくる量でしょう。1ミリシーベルトというのは初めからICRPでわかっていることですから。今言うぐらいならば、何でそういうところをやったかですよ。20ミリシーベルトという、きょうは降っていませんけれども、大雨の中に子どもをやって、そして、傘差して1ミリシーベルト危ないからぬれるなということと一緒になんです。守るのは大人ですよ。

大学によっていろいろ違いますけどですね、発表はいろいろ違うんです、原子力はですね。よく言われる100ミリシーベルトはいいというのもおるんですよ、これが教授かというぐらいですけどね。教育長は今わかっていただいて、あんまり言いませんけれども。もし私が40キロのスピードのところを80キロで行きよつたと。そいぎ、教育長は私を捕まえた。私聞くですよ、80キロでんよかろうもんで。なし80キロでいかんかと言われたとき、教育長答えられますか。だれでも答えられんて、こいは。確率の問題だから答えられないんですね。だから、20倍、20ミリシーベルトに上げるということは20倍危険がふえるということなんです。それで死ぬということじゃないんですよ。80キロで事故起こさん人もおるでしょう。40キロ以下でも起こされる人はおるんですよ。しかし、社会通念上、受忍限度と考えれば40キロですて、いろんなことがあって決めてあるんですね。だから、80キロは証明せろと、証明できない。それをいいことにね、100ミリまでいいんだという話がされています。

しかし、もう4日ぐらい前ですかね、テレビで出た話ですけども、99.8ミリシーベルトで悪性リンパ腫ができた、悪性リンパ腫ね。そして、その方が白血病で労災認定を受けられたんですよ。もし——連中と言うたらいかんですけどね、大学のお偉い先生たちですけども、その方たちが言っていることが正しいならば労災認定かかりませんよね、問題ないなら。だから、ぜひとも1ミリシーベルトにですね、それはちゃんと頭に入れとかにゃいかんと。

そしてまた、市長、社会通念上から考えてもおかしかったですね、今まで1ミリシーベルトで自分たちが言いよつたんですよ。放射能が漏れて飛んできた、途端に20ミリでしょう。そりゃなかろうもんと思うんですね。

それは、作業員さんが今東電で頑張っておられますね、あの方たちがまあまあ、もう我慢しようと、後で管理すればということで線量引き上げがあるのは仕方ないですね。あるいはまた、教育長があそこよい先に生徒がおると。少しは放射能を浴びてでも子どもを助けに行かにはならんと特別の事情があるときはいいんですよ。しかし、一般人を上げていいという話は何もない。それは法律があるんですよ、法律が。調べたら出てきましたよ、電離放射線障害防止規則、これは放射線を扱う作業員の方たちが使う労働安全衛生法に基づくものなんです。昭和47年につくられているんです。最終決定が23年1月14日、これにいろんなことを決めてある。教育長、これは作業する人たちのものですよ、一般人じゃないです。一般人は先ほど言うたように、我慢できる限度というのは1ミリシーベルトですね。これは

うたってあるんですね。

資料をお願いします。1ミリシーベルトのところですよ。よかですか。

(パネルを示す) つまり、年間1ミリシーベルト。シーベルトというのは雨、放射能の雨と思ってもろうたらいいですけども、年間1ミリシーベルトというのはICRP、国際放射線防護委員会の基準で書いていますけど、これ勧告ですよ、調べてもらったらわかります。つまり、先ほど言いました我慢できる限度、受忍の限度ですね。人間は社会生活する上において、ある程度の危険は承知して生活しなきゃならないという最低が全世界的に1ミリシーベルトですよ。肩と肩がぶつかるかもしれない、足を踏まれるかわからん、それくらい我慢しましょうというのが1ミリシーベルトですね。基準というのは1億人に5,000人のがんが出る可能性があるし、遺伝子に異常が発生する場合があります。

ここに赤でECRRで書いとっですね。これは欧州放射線リスク委員会と、欧州ではこれを使っている。これによりますと、年間に0.1ミリシーベルトなんですよ。何で国際の基準がこう違うかといいますと、このICRPは内部被曝を考えていないです。今、東電が大変な目に遭っているでしょう。このやり方なんですね。ECRR、こっちは内部被曝を考えたもっと下げにゃいかんですよ。今政府も下げ出したですね、内部被曝がありますからね。

そして次ですけども、これまで原発見学に行くと、その被曝限度は年間1ミリシーベルトですが、原発では年間50マイクロシーベルトを守っています。次んところですよ。さっきの80キロと一緒にですね。だから、20倍安全ですと、こういう言い方なんですね。だから、反対を言えば20倍危険なんですよ。それと、ここ5ミリシーベルト書いとっですね、年間。これは放射線管理区域ですよ。放射線管理あっちこっちあっですね。しかし、これ年間で書いてありますが、ほとんど3カ月です。3カ月で1.3ミリシーベルトです。だから、1ミリシーベルトも3カ月で250マイクロシーベルト、基準が、これ3カ月と覚えてってくださいね、3カ月覚えてくださいね。この5ミリシーベルトに一般人は立入禁止なんでしょう。20ミリをかけておるんですよ。しかし、5ミリでも立入禁止なんですね、病院など放射線マークが張ってあっですね。

(パネルを示す) これは我々が愛した武雄市民病院のマークです。「放射線管理区域」とちゃんと書いてある、病院ですね。武雄市民病院とですよ、撮ってきていただきました。ここが「注意」と書いて、「指示があるまで入室しないでください」。なぜならば、こっちは5ミリシーベルト以上あるからですよ。ここの中で働く人の最高が20ミリシーベルト内の先ほど言った。一般人はこの外なんですよ。

(パネルを示す) この20ミリシーベルトのやつですよ、すみません、順序がばらばらでごめんなさい。

子どもに今、文部科学省は強いているですね、強いてるですよ、無理強いしているですよ。年20ミリシーベルトというのは職業的に放射線を浴びる人の被曝限度なんですね。女性の働

く人は3カ月で5ミリシーベルトなんです。20だからいつでもどうでもいいということじゃないですね、均等にやっぱり考えてある。3カ月で——こい覚えとってくださいね、後で出てきますので。

というのがですね、浪江町、2週間で14ミリシーベルトに達しとっです。そのときの政府の態度を後で新聞紹介しますけど、こうなとっです。しかも、被曝量を測定し健康診断を受けなければならない、健康手帳をつけなければならない。さらに、白血球の減少を定期検診を定期的を受けていかにかいかん。健康手帳もつけていかにかいかんということなんです、これが20ミリシーベルト。さらに、子どもは3から5倍感度、さっき教育長言われたですね、3から5倍感度が高いので、3から5下げにかいかんです。20で5倍上げたら100ミリシーベルトですよ。緊急作業員の最高限度ですよ。これを平気でされている。1年で20ミリシーベルト、5年で100ミリシーベルト、絶対これ守らにかいかんです、5年で100ミリですね。緊急の場合は1年で100でいいとなっているんですよ。しかし、今回、特別また改正した。特別福島方式ですね。緊急作業員として放射線量を250に決めたんですよ。大人はいいですよ、問題は子どもなんですよ。

教育長にお伺いですが、この実際の数字を見て、今の5ミリシーベルト、つまり、放射線のところ、いろんなのを見てですね、先ほどの考え方、文部科学省の考え方どう思われるか、さらに答弁を求めたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

御質問いただきまして、さらに私もこの放射線等について学んだわけではありますが、どう見ても先ほど来、話がありますように、同心円的じゃなくてということも、子どもたちの居場所、学校等を考えますと、当然考えましたし、今お話にありました1ミリシーベルトということも、今の川口市が自分の市でそういう数値を決められなければいけないような現状が全国にあるということですので、また、私ども次の計画、防災計画等も踏まえまして、特に議員、子どもを考えていただいているということ、そこも踏まえまして私どもも心していきたいというふうに思います。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

今ですね、本当に教育長はね、心底まじめに言っておられると思いますけれども、文部科学省は今何て言っているかと。学校で1ミリシーベルトですよ、ほかのことは言わない。じゃあ、道を歩くときは国土交通省が1ミリシーベルトを言うんですかと、家に帰ったら環境省ですか、そうじゃないです。生活全部するんですからね、総合的なんですよ。そして、

短時間で受けない。これはみんなやっぱり子どもたちを考えてしなければならないと思うんですね。

もう1つ大事なことは、この前、サーバーメーターですか、サーベイメーターですか、どっちわかりませんが、今度買うと言ったら、すぐね、寄附してくれるてあったというんですね。東京がモニタリング、18メートル上だと文句を言いますね。千葉県も12メートルですか、わかりませんが、高いと、こう言われているんですね。そして、文部科学省はモニタリングでいいですよと言っていますけど、これは放射能漏れの前ですよ。放射能が漏れたら、もちろんモニタリングも要りますけど、実測ですよ。放射線が飛んできているんですから。だから、市長、はかると言うたんでしょう。いいことだと思うんですね。

見えないし、におわないし、痛くもないですから、わからない。ガイガーカウンターしかわからん。ガイガーカウンターでもアルファ、ベータわからんですよ。だから、まず地上がどこにあるか、飛んできて下に落ちますからね、放射性物質は。調査を厳しくする、これ大事なことなんですね。飛んできていますから。

よくほら地区の入り口でね、だれかこう、うちに不審者のうろうろしよったばいと言え、そいぎ、そい見張りのおっけんよかて言うですか。家に帰って戸締まりばすっでしよう。それと同じなんですよ。だから、絶えず成長期にある子どもたち、一応守ると。見えない敵から子どもを守る姿勢は絶対必要なんですね。

それから、これは物理学者の天才、湯川秀樹先生。この方はですね、あれだけの人もレントゲンは1回も受けられんやっただすね、彼は。有名な話ですよ。彼が言うには、先生が言うには、博士が言うには、レントゲンというのは、ガンマ線というのは人間の体を散弾銃で撃つようなものだと、人間の体を散弾銃で撃つような。考えたらそうですよね、フィルムがあって人間が前におって放射線を浴びるでしょう。肉は通しますよね、骨にとまって後ろが白く映るんですからね。だから、先生は必ず体に、どんなに小さくても、放射線がどんなに小さくても体に害があると、後は確率ですからね、ということで先生が受けられなかった、これは覚えとってほしいと思うんですね。そういうふうをお願いしたいと思います。

それから、これまで流れの中で、非常に今度の原発、原発事故に対して私のうがった考えかもわかりませんが、3つに分けらるっと思うんですね。3月12日、水素爆発を起こしたですね、そのとき放射性物質がどんで飛んで出たんですね。しかし、そのとき政府は直ちに影響はない、大したことないと言っていたですね。3月15日に3号機の爆発ですね、これはプルサーマルでしょう。しかし、プルトニウムは何も出ていない。しかも、これまでは使用済み核燃料というのは六ヶ所村とかどこか、それとも300メートル地下とかいろいろ言っていましたね、何のことない、屋内に置いとったんでしょう、水漬けて。それで慌てて16日に水をかけに行ったら、アメリカから言われて行ったら、余りに放射線がひどかったために近寄れなかった。そして、水を17日かけて、菅さんはオバマさんに電話した——そい知ら

んですけどね、話があるぐらい。15日からずうっと言うてきたのが5月14日までですよ、3月15日から。何て言うてきたか。メルトダウンしていないと言った。そりゃ当初に戻りますけれども、メルトダウンという破局的な状況は起こらないと言ったですね。だからと思うんですけどね。ずうっとメルトダウンしていないと。5月14日からですよ、いや、実は言い出したのはですね。

聞くところはちゃんと聞きよってよかですよ、そがんメモせんでもね。

5月14日にですね、先ほど言うように、東京電力をつぶさんやったつとです。東京電力国有化しない、つぶさない、賠償スキームが決まった日でしょう。これが実は新聞に出とつとです、ずうっと持とたら。

3月12日の新聞ですけども（現物を示す）これですね。これでは3月12日の新聞ですよ、圧力容器が破損かと書いてあつたですね。スリーマイル事故と同種だと書いてあつた。京都大学の先生、あんまい高つか声じゃ言われんかわからんばつてん、大学によって違うですね。厳しく言うところと厳しく言わないところがある。研究費が余計要るか知らんですけどね。これは京都大学の先生、今中先生、セシウムというのは核燃料が加熱しないと出ない。12日ですよ、爆発した日ですよ。原発の外で検出されたことは原子炉を覆う圧力容器から漏れているとしか考えられない、こう言ったんですよ。圧力から漏れていますよと言った。

そして、かわいそうだったか知りませんが、中村審議官覚えていらっしゃるか、12日、保安院の。この方はやはり同じく、燃料の核分裂に伴うセシウム、沃素が出ているから、セシウムと沃素が出ているから炉心溶融が進んでいる可能性があると言ったんですね、この方は二度とテレビの前には出られなかったんですね。かわりに出てこられたのがだれでも知っていると思いますけれども、眼鏡かけた人ね、西山さんね、名前言ったらいかんかな。その方がおっしゃるにはですよ、こうですよ、12日同じときですよ、今回の炉心溶融について放射線物質の広がりを計算した結果、計算したと書いてありますからね、計算したんですよ、推計じゃないですよ。計算した結果、現時点では半径10キロを対象とする住民避難の範囲を変更する必要ないだろうと。これが大変な被曝をさせたんですね。東電の事故隠しとは言いませんけれども、そう疑われても仕方のないような話があつたんですよ、こい5月24日ですよ。だから、3月15日と5月14日の後を比べればね、事実が出てくるんです。

5月14日の新聞、これは郡山市、60キロ離れている。この60キロ離れた郡山市で、ここの高校の先生が3月12日ですね、実は津波の後の写真を撮りに来ていた、福島までね。そしたら、ドーンと音がして見たら地響きした。原発の方向だったということね。それで家に帰ったら、こうですよ。ばちばちと激しく反応する線量計の音に放射性物質の恐ろしさを知ったと。60キロ離れているんですよ、12日ですよ、線量計振り切つとると。

さらに3月16日、このときは低かつたんですね。何メートルの高さかわかりませんが、11ミリシーベルトだったと。これは単純計算して96ミリシーベルトですね。100ミリが

最高の、ほとんど最高に近いですよ——がした。これが根本ですけれども、文部科学省は除染対策、放射線をですね、何もしないで、自治体任せて。市長、自治体任せするそうですよ。それは「おそれがある」で、放射能が漏れたという話は国会は何もしていないからですね、だれもしない。

それですけれども、運動場の泥、放射性物質行くところないでしょう。こういう状態です。今から始まりますけどね、こういう状態なんです。

そして、「動かぬ国にたまる不安」というのを高校生がホームページに書いている。汚染地域の児童及び市民が一方的にこういう仕事をさせられよって、なしかて。政府はなかと——そいは書いてなかですけどね。本当、無政府ですよ。状態だと思います。

先ほど3カ月で5ミリと言うたですね、女性の場合。働く人ですよ、覚悟して働く人が、それに対して、この新聞で、福島県浪江町の一部では3月23日から4月10日までの積算放射線量が14ミリに達している。2週間です。これに対して原子力安全・保安院、名前も書いてあります、原子力安全・保安院の〇〇さんは積算被曝線量が20ミリシーベルトに達するまでにはまだまだ時間の余裕があると言っているんですよ。そして、即時の緊急避難は必要ないとの立場だと言われている。この言葉どう思いますか。（発言する者あり）名前ですか（発言する者あり）

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

お話にありましたように、先ほども少し申し上げましたが、積算する部分、中には除去される部分もあるみたいでありますけれども、半減期等のことで、問題で積算される部分というのが見えないだけに注意しなければいけないことかというふうに判断いたします。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

いや、だから、私が教育長に言うたとはね、1ミリでも被曝をさせないという考え方が必要なんです。何も、おけ1杯くんで幾らじゃないんですから、20ミリでね、まだ20ミリでないからもっといいんだ。とてもじゃない。それもさっき言いましたように、3カ月で5ミリシーベルト、2週間で9カ月分浴びとっです。異常がないわけじゃないじゃないですか。だから、こういう姿勢をですね、我々も一緒ですけど、正さなければならぬですね。そのためにやっぱり我々がもっともっと理論武装せないかと思うですね。平気でこういうことを言っているのが記事に載っている。これ名前がですね、原子力安全委員の代谷誠治さんというんですか、委員ですね、そう書いてあります。

そこで、これは4月20日の新聞ですよ。これはですね、まだこのころ飯舘村は移住してい

なかったんですね。非常に厳しかった。そのときに学校では20ミリシーベルトということで、昼間8時間、夜16時間と計算しましたね。昼間は8時間で3.8マイクロシーベルトという数字出した。覚えとっですか。そういう指導があったと思う。それ以上はだめだけど、それ以下はいいよという話ね。それもさっき言うたように、それ以下はいいよと、それではほたっとしていいよという感じね。できるだけ早くというのはないんですよ。そういう中で、上のこれがガイガーカウンターですね。大体20ミリまでですよ、20マイクロシーベルトまで。ここをはかってみたら19.999で振り切ったというんですよ。振り切った。

そうすれば、先ほど20と言いましたから5倍ですよ、100ミリシーベルト。作業員でも直ちに逃げなければならない数字がここにある。これは飯舘村の長沼地区ですよ。「長沼」と書いて「ながどろ」と読むんですね。長沼地区なんですね。この状態でいけば年間おれば116ミリシーベルトになってですね。もっとつらいのがここにありますけどですね、教育長ね。これ新聞、5月20日の佐賀新聞ですよ、うちは佐賀新聞ばかりですからね。早く逃げたい、指示されんけん逃げ切らんとですよ。子どもがいるから早く逃げたいのよと言っておられるんですね、早く逃げたい、不安を抱えて息を詰めて過ごす日々、この方が嶋原さんという方です。嶋、鳥のシギですね、区長さんが嶋原さんて、恐らくお孫さんと、これ小さい子どもを抱えているんですね。この子の家の前をはかったら、15マイクロシーベルト、つまり4倍ですよ。20倍という高い、これがまた4倍ですよ、80倍のところこれから大きくなる成長期の子どもの、抱えながらお母さんどうしていいかわからんけん迷っているところなんですね。その後避難させたですね。直ちにしなきゃならない、しなかったということなんですね。

それと、これは5月1日の新聞ですけれども、女子高生が不安を訴えた。（新聞切り抜きを示す）これ見られた方おっですね、市長ね。東京電力の副社長が謝りに行ったとき、女子高、高校1年の渡辺さんというところが文句言った。文句じゃない、悲しみ、叫びですよ。どう言われたかといいますと、東電幹部が住民説明会に行かれたとき、副社長がね。これ聞いたら本当たまらんですけれども、その渡辺さんが、子どもが産めない体になるのではないかと不安を訴えた。こういう高被曝の中ではね、将来、生殖器に一番異変を起こしますからね。これはもう文献上出てきますからね。子どもが産めない体になるのではないかと不安を訴えた。それに対して東電側は、いろんな対策をとり、そうならないように努めていますと言ったんですよ。いろんな対策をとり、そうならないように努めますと言ったんですね。どういう対策があるのでしょうか。どういう対策があると思いますか、答弁求めます。わからん、わからんでよか。

○議長（牟田勝浩君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

放射線の妊婦への被害というのは、一般的に言われているぐらいの知識しかないわけでありましてけれども、その東電の対策となると私もちょっと今検討つきません。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

これ妊婦じゃない高校1年生ですね（発言する者あり）高校1年の方ですね、この方が言ったらね、今言うたように、子どもが産めない体になるのではないかと言った。そしたら、いろんな対策でそうならないように努めますと言うた、これ大人ですよ。この方が言ったのはね、だったら、もっと早く避難させろて、避難指示してほしかったって。当たり前のことをですね、やっぱり逃げようとするんですね。これ本当は最初ですね、細野豪志が、もう名前を呼び捨てしたいですけどね、パニックにならないようにと言うたときに、既にもう1ミリシーベルト以上は物すごい数なんですね。それはもう東電が倒れるぐらいの事故ですよ。倒す、倒さんは後の話ですからね。それを隠したというところが、子どもたちにしわ寄せがきている。だから、早く逃げられるように、市長がね、大規模災害に備えられるように原子力対策を考えていただきたいと思うんですね。

それから、何日の新聞やったかね、周辺住民15万人、30年以上検査せにゃいかんとですよ。（新聞切り抜きを示す）先ほど電波法を見せましたね。30年以上検査する、しなきゃならない。

（新聞切り抜きを示す）これ6月16日の新聞ですよ。子ども3万4,000人に線量計つけたですね、福島。これはフィルムバッジですよ。フィルムバッジということは積算量と違って結果を後で見るとつですね。もっと言えば、これは善意でつけておられますけど、さっきの法律でいけばつけなければならぬんですよ、20ミリシーベルトのところにおるんであれば。よう私がほんと勘違いではなかろうかと何回も読み返したところなんですね。

もう1つ忘れていましたけど、これです、一時帰宅のとき。（パネルを示す）先ほど言いましたけれども、川内村にですね、教育長ね。あなた文部科学省やけん聞きよっとですよ。一時帰宅するときに、そのときの話が、こい何日やったですか、そのとき新聞に載っているんですね。住民の皆さんというのは久しぶりに帰りますから、わずか2時間短過ぎると言ったんですね。もっとおりたいと言われたんですね。そのとき政府が答えた言葉ですけども、一時帰宅、短時間過ぎるとの質問に対して、細野豪志首相補佐官は、最大限希望に沿う形で努力した中で、安全上やむを得ない判断と言ったんですね。安全上やむを得ない判断だと。池田元久経済産業副大臣は、とにかく安全上の制約があるから時間を広げることは難しい。経済産業省、原子力安全・保安院は一時帰宅時の助言をしたんですね、これから大事なことですけれども、正式な滞在期間は原子力安全委員会が1回の立ち入りでの被曝線量が1ミリシーベルトを超えないように助言したと。年間の被曝量1ミリを超えないようにしたと書い

てあるんですよ。一般人の年間被曝量なんですね。これで見えるもの、このとき立ち入りは自己責任になったね。自己責任の同意書をとろうとしたんでしょう。自分の責任で入りますと、1ミリシーベルト以上は自分の責任ですと書かせようとしたんですよ。先ほどの文部科学省も一緒ですよ。だから、知り尽くしてしたとしか考えられない。だから、我々が考えていかなければならないという内容なんですね。

それで、時間が過ぎましたので、この分はまとめますけれども、市長ね、5年後、10年後、20年後、うちのことじゃありませんけれども、人ごとでもないですね。がんが起こったときに大人がああときこうしとけばというのであればたまらんですよ、将来の補償をするよりは今そうならないようにすべきというのは大人の責任だと思うんですね。

そこで、いずれにしても、武雄市民の皆さん方の生命や財産を守るためには、やはり放射線物質、放射線量から逃げるということをぜひともEPZに入れるようにしてもらいたい。来ないと思いますけど、あした来るかもわからん。そのときに武雄市は30キロ圏外で関係ないやなくて、ここはもう5ミリシーベルトとなりますよ、危ないですよ、避難してくださいと言えるですね、そういう国が出すような指導をぜひとも市長を先頭してしたいと思いますけれども、最後のその決意をお願いしておきたいと思います。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

いや、やりますよ。しかし、今の民主党政権じゃだめですね。

〔23番「かえましょう」〕

○樋渡市長（続）

はい、かえましょう。やっぱりですね、今までこの手の話は幾らでんあってきたとですよ。しかし、民主党政権で話をしてもですね、言うて、わかっつ、わかったと言んさつとですよ。そいぎ、そいがですよ、国の各官庁に届いとつかというぎ、何も届いとらんですもんね。そいぎ私は嫌われとつですよ、民主党から。しかし、民主党から宮本栄八さんのごと好かれとんさつ首長さんもおんさつわけですよ。しかしね、その人たちの言葉ですら届いとらんとですね。こりゃね、完全な不作為です。ですので、私は相手を選びます。相手を選んで今までみんな私は信じていました。

しかしね、やっぱり今回は市民の生命、財産を守る意味からでも民主党をしっかりとかえて、その中でやっぱり生まれ変わった、もう私は自民党がよかと思ひますよ。もういろいろいいかげんばつてん自民党もよか。そいで、公明党はそのお目付役でつかんばいかん。それで、その中で私はしっかりと言うていきたいというふうに思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

いろいろ暗い話もしましたが、明るい話もあるんですね。今度の大地震の中で大勢の命が助かったという話も御披露しときたいと思います。

（パネルを示す）群馬県の「片岡」と書いておりましたけれども、教育部長の教えで「片田」教授ですね、この方が釜石中学校に津波対策3つの教えと教えられたんですね。これによりますと、想定を信じるなど、まず来たんですね。きのう、ハザードマップいろいろありましたけれども、想定を信ずるな、想定は想定でしかない。ハザードマップでは想定しかできないということで、地震が来た、この中学校はまず停電したんですね。そしたら、校内放送は使えなかった。校内放送が使えなかったもので先生慌ててハンドマイク探しに行った。それで戻ってきたときには、下に書いてありますように、中学生が山際の道を高台へ向かい走っていった。もうすぐ走ったんです、自分たちで。指示待ちじゃなくて走っていた。それまで小学生は3階で待機していたが、それを見て一緒に走ったと書いていますけれども、鶴住居小学校なんです。鶴住居小学というとは3階建てなんですね。3階建ての屋上におった。眺めてみたんですよ、ここから議会事務局から見れば、ちょうどその高さですね、まさか向こうから津波が来ると思わないような高さなんです。しかし、お兄ちゃんたちが走っていったから自分たちも一緒に走っていったんです。この鶴住居小学校の3階の一番角のところに軽乗用車が――紺色やったと思うけど、突っ込んでいるのがテレビで出たことがありますけどね、それが鶴住居小学校。

そして、さらにこれだけやなかった。2番目、最善を尽くせ。高台にみんなやっとかさ到着した。しかし、どんどんどんどん水が来る、がけが崩れる、それを見てですね、もう1つ上へ行こうということで車いすを押して、そしてまた、幼稚園児を抱えて、そして、小学生の手を引いて上に上がったんですね、そして、やっぱりそこまで流れたんですよ。これが想定を信じるな、最善を尽くせ、これは絶対必要なことだと思うんですね。

それと、これは直接、津波では絶対教えられるそうでございますけれども、率先避難者たれ、ちゅうちょなく率先することが、逃げる姿を見せることがまず必要だと言われたんですね。このことについて、市長、何かございましたらお伺いします。

○議長（牟田勝浩君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

これ陸前高田市に行ったときに全く同じことを聞いたんですね。大人の言うことば信じて学校に逃げ込んだら99%の方が亡くなった。で、学校の先生の言うことを聞かんで、いや、こいはおかしかろうもんと、上に小学校高学年の子がだーっと上がっていったら中学生とか保育園児がついていった、全部助かっとなんかですね。だから、何を言いたいかということ、やっぱりこれは戦争と一緒になんですね、想定を信じるなということと、もう1つは、最善を

尽くせということと率先避難者たれというのは、孫社長もおっしゃいますけど、退却は最大限とると、スピーディーにとるということは、それは我々も心して、これを市民の皆さんたちにきっちりね、やっぱり伝えていく必要があるだろうという認識をしておりますので、この場をかりて私もこれぜひ申し上げたいと思っていたんですよ。ありがたく思っております。

○議長（牟田勝浩君）

23番黒岩議員

○23番（黒岩幸生君）〔登壇〕

よくされるのが、市長はもう絶対しないと思いますけど、避難場所学校、避難場所役所、これよくあるそうですね。それが一番の間違いのもとだとも言われております。

先ほど言いますように、私が一番きょう言いたかったのは、放射性物質に対しての避難、このことについて私自身まだまだ勉強不足でございますし、間違っただこともたくさん言ったかもしれません。あくまで3月11日からこれまで新聞を見たりテレビを見たりして積み重ねたことでございますので、間違いがあるかもしれませんが、目に見えない、この放射線物質、放射能の恐怖に対して武雄市民を守るために大きい見地に立って頑張っていたことを期待しまして、もちろん私も一緒に頑張りますけれども、質問を終わります。

以上です。